対馬歴史民俗資料館報

第14号
平成3年3月

編集・発行
長崎県立対馬歴史民俗資料館
対馬厳原町今屋敷
郵便番号 817
電 (09205)－2－3687
印刷所
長崎市栄町6－23
昭和堂印刷
電 (0958)21－1234

館長あいさつ

対馬歴史民俗資料館長　山下義之

わが対馬が、三世紀末の中国の史書「三国志」の魏志倭人伝に、「居る所絶島、方四百余里ばかり、土地は山嶮しく、深林多く、道路は禽鹿径の如し、千余戸有り、良田無く、海物を食して自活し、船に乗りて南北に市糴す。」とある。

即ち、山が多く良田に恵まれないため、自活を海に求め、更に隣国朝鮮との交易を行ったと想像される。

このことは特に、昨年韓国大統領が宮中での晩さん会で、雨森芳洲先生の交隣の精神を引用し、紹介された如く、遠い昔より隣国との交易によって、常にその時代の中で息づいた島である。このように対馬は、海によってとざされ海によって開かれた島であるともいえる。

そのためか対馬は文化財の宝庫として、貴重な文化遺産が先人達から伝えられ、永く今日に受け継がれ保管されて来ている。それを守り受けつぐ役を担っているのが本対馬歴史民俗資料館である。

昭和五十三年に資料の散逸等を考え、日本歴史館七番目として誕生したのである。その基本姿勢は、長崎県立対馬歴史民俗資料館条例の第一条にうたってある。「対馬島内の歴史的文化遺産を収蔵し、教育・文化の振興に資するため」とある。

このために国をはじめ各町および関係諸団体のご援助と多くの有識者の賛助のもとに、その条例の趣旨達成のため、莫大な資料の整理も着々と進められ、今尚、その整理は続けられている。

近年、このような収蔵文化財が多くの方々に知られたことで、本館の資料を研究のため大学の先生や民間の有識者の方々が来島され、本館を利用していただく機会が多くなった。

また、島内の小学生から高齢者に至るまで、島内外の観光団はもとより、隣国の大学教授から学生等までが生涯学習の一端として、自己研鑽にお見えになっていただいている。

このように本館では少しでも多くの人々が、利用し易く、気軽に足を運んでいただけるよう努めている。

当館の三人の研究員は、来館者に対馬の古くからの文化をより御理解いただけるように、その資料の収集と整理また展示にと努力し続けている。

先人達の築いてきた偉業をひもどき、そして、その過程を学ぶことによって、新しい文化の創造に資することになればと考えている。また、郷土の素晴らしい歴史とそれを築いてきた人々の素晴らしさを幼時から見聞させることで、郷土の良さや誇りを持たせ、引いてはわが郷土を愛するようになればと願うものである。

最後になってしまったが、本館が他に比べ誇れる資料が多くあるのは、対馬の文化と歴史を愛する多くの方々のご協力とご援助によるものであり、改めて厚くお礼申し上げる次第である。

対馬歴史民俗資料館案内

▽常設展示資料紹介△

当館は、昭和五十三年十二月に開館いたしましたが、宗家文書を中心に、多くの方々の御支援を得て多数の資料を収集してまいりました。いずれも対馬の歴史・民俗を考える上で欠くことのできないものです。そのうちのほんの一部ですが、常設展示資料の紹介をいたします。

No.1　展示室

○古文書
・毎日記　・対馬藩奉公帳
・朝鮮信使記録　・地方文書
・義成様江之御奉書　・その他

○考古資料（対馬の出土品）
・縄文・弥生時代の土器
・石斧・骨剣・鉄剣・広形銅矛
・釧（腕輪）・鏡　・その他

○美術工芸品
・統一新羅・高麗・李朝の仏像
・梵鐘（重要文化財）

○民俗資料
・衣・食・住に関するもの

○その他
・雨森芳洲先生の肖像及び掛軸
・清水山城金石城絵図・大般若経
・草梁倭館の図　・厳原町絵図
・宗家の鞍・蝶足膳・煙草盆他
・御亀卜

No.2　廊下展示

○動物
・オジロワシ　・ツシマジカ
・ツシマヤマネコ　・ツシマテン

○その他
・朝鮮国信使絵巻・対馬歴史年表
・麻蒸し甑（しき）・石屋根模型
・対馬の漁具　・絵画　・写真

No.3　展示室

○美術資料
・陶磁器類（釜山窯・対州窯）

○民俗資料
・生活に関するもの

▲展示室

収蔵資料案内

―平成元年十二月現在数―

1. 考古資料
○志多留貝塚発掘資料　一三八点
○越高遺跡発掘資料　一〇一点
○ヌカシ遺跡発掘資料　一〇点
○塔ノ首遺跡発掘資料　五一点
○金石城跡出土資料
○浅海湾沿岸遺跡発掘資料
・ガヤノキ遺跡
・チゴノハナ遺跡
・ハロー遺跡
・佐保赤崎遺跡
・スス崎遺跡
・寺崎浦遺跡
・貝鮒崎遺跡　・島山赤崎遺跡
・海落遺跡　・仁兵衛島遺跡
・玉調遺跡　・五次郎遺跡
・菜畑遺跡　・西ノ神遺跡
・白蓮江遺跡　・平野浦遺跡
・弘法浦遺跡　・小式崎遺跡
（現有二七、一一五点）

2. 古文書
○宗家文庫（毎日記）　七、三五七冊
○宗家文庫（記録類）一九、七八九冊
○宗家文庫（漢　籍）　三、〇三一冊
○宗家文庫（和　書）　二、四七〇冊
○地方文書（中近世）　三、〇三四冊
○島庁文書（古文書）　二二七冊
○島庁文書（行政資料）　五五七冊
○経　典（長松寺）　六〇〇巻
○経　典（東泉寺）　二〇八巻

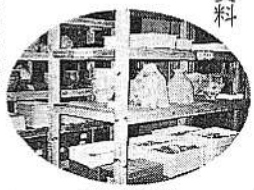
3. 美術資料
○美術・工芸
○歴史資料
○動物（はく製その他）
○写真パネル

4. 民俗資料
○生活用具
・製糸用具（たかだ）・織機（地機（じばた）・高機）
・麻織物　・着物類　・炊事用具　・調理用具　・食器　・臼　・杵　・茶簞笥
・簞笥　・長持　・葛籠
・行李　・薬入簞笥　・灯台
・燭台　・提灯・行灯　・火鉢
・金輪　・五徳

○農器具その他
・鋤　・鍬　・馬鍬　・鎌　・箕
・俵編み
・山樵用具　・狩猟具（鉄砲・煙硝入）

○漁具等
・漁撈具（釣・銛・磯金・網）
・漁船（模型）　・その他

○祭祀
・祭祀用具　・供献品
（現有一、二二七点）


▲収蔵資料

展示品の解説

アサムシコシキ

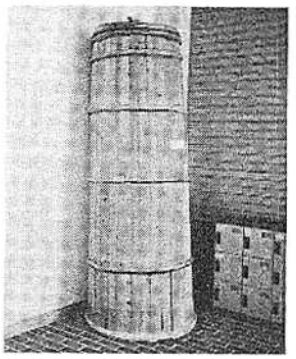
対馬の神事・佛事の時、また衣料・農具・漁具に欠かせない麻の栽培が昭和二十年代から行なわれなくなり、麻をウムス（蒸す）晩夏の風物詩も農村から消え失せた。

対馬の農家では三月下旬、肥えた畑に茎が直ぐにのび、枝葉が繁らないようにと麻種をこくまく。八月中旬、1米～二・五米にのびた麻の茎を根元から刈りとる。葉の茂った枝を短刀状のアサウチで叩き落した麻茎を乾かないうちに、蒸す場所に運び、円筒状のアサムシコシキで蒸す作業にとりかかる。

農家によってはアサムシコシキを私有する家もあるが、むらの多くは数組にむらを分け、各組一つ所有して共用した。共用の場合、麻茎を蒸す日時はくじ等で決めて、その日に会せて各家は麻を刈った。蒸す日数は各組一週間要した。終ると近くの小屋に運び、軒下にたてかけるか天井に横に吊って保管し翌年に備えた。

麻茎を蒸す場所は、蒸した後の諸作業の関係でむらなかを流れる川の岸辺の空き地が選ばれ、アサムシドコ等とよばれた。その場所にくど（竈）を川石で築き、深底の径一米位のはがまのエンナベを据える。水をエンナベに入れ、竹簀を敷いた上に、麻茎の束を互い違いに立てる。エンナベのつばには、蒸すとき蒸気のもれぬようにわら製の輪をおき、それにアサムシコシキをのせる。数軒が共同して蒸す時は、束ごとに目印しの布切れのふだをつけた。美津島町今里でははがまの簀の上に、高さ一米位の底のない桶をすえ、その中に、麻茎の束をたて、アサムシコシキをかぶせた。

麻茎をアサムシコシキで蒸す作業は、はねつるべの仕掛けに似た要領で上げまた下げした。



高さ　250糎　上の径　78糎
下の径　100糎　材料　杉材

(1) 五米位の木柱の上部に、同じ長さの横木が左右に動くようにカズラ（ふじかずら）をまいて結びつける。

(2) アサムシコシキの上底の中心に十五糎角の穴をあけ、四十糎位の木棒の真中に一米程の綱を結びつけ、穴の中に入れる。他の端をくどに近い横木の先の部分に結びつけ、アサムシコシキを吊り下げる。

(3) アサムシコシキを吊した横木の他端に、二米位の綱を結びたらす。

(4) たらした綱を数人で引っ張ると、その力でアサムシコシキは上がる。

(5) 上ったアサムシコシキをエンナベにたてられた麻茎の束の上に、注意深く引っ張っている綱をゆるめながら覆うように下してエンナベのわらの輪の上に、そっと置く。そしてくどに火をたく。アサムシコシキの上底の穴からあがる水蒸気の量が少くなると、はしごを掛けてのぼり、穴の中に水をそそぐ。時々アサムシコシキを引き上げては麻茎の皮をむき蒸し加減をみる。約十時間蒸すと麻茎の色は土色に変り、皮がむき易くなる。引綱を引き、アサムシコシキを上げ、麻束を取り出す。

農家の主婦は麻茎の束をといて、川水にひたす。一昼夜位さらした後指先で皮をむく。皮はパラッと簡単にとれる。この荒皮をアラオといい、むかれた茎をアサガラといった。アラオを束ねて家に持ち帰り、天日で乾かし、灰汁をいれたナオナベで約三時間にる。とりだして川水に浸し乍ら、太さ小指程の長さ約十糎の女竹の二本の管に、ツヅラ（ツヅラフジ）を通して繋いだオコギに強く挟んで皮をこぎ落すと、麻のせんいが見えてくる。再び水にさらし、乾かすと白色～淡黄色になる。これをオといった。アサガラは日除けのすだれや、大根の切り干し、孝行いも（甘藷）の湯がき切り干しを乾かす簀に編んだりなどした。

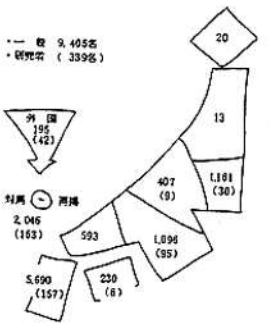
オは飯びつ状のオオケに入れておく。農家の女性は夜業にまた暇な折、オを叩いて柔かくして、少し湿し乍ら指でさばいてバラバラにする。更に針で細かく分けて、結び玉がつかないように、できるだけ長くつなぎ合せた。このことをオム（績む）といい根気のいる仕事であった。それをオオケの蓋にまるくたぐりいれ糸より車にかけて麻の糸にした。この麻糸また染色した麻糸で夏の着物のカタビラ、蚊帳が織られた。

対馬に伝承の手まり歌に「向へ婆さん」がある。「向へ婆さん　縁から見れば……川に流れる　苧の屑拾　績んで揃えて　紺屋にやあって　赤う染めて　黄う染めて　手まりに巻いて　ついて見ると　よう上る　そこ一貫　貸しました。……」麻に寄せる微笑しい村童の歌である。

歴史民俗資料館への足音

(1) 1　入館の状況

地方別の入館者数（年間）



(2) 特に多い都道府県（一般の場合）

長崎県二七四二名（対馬を含む）

福岡県二二〇七名　兵庫県四七五名

東京都　七一〇名　大阪府四二二名

2　研究入館者の概況

(1) 入館者数について

本年度島外からの研究者は二五名で一八六日間の研究日数であった。また島内は三七名で一五三日間である。この中には八〇日を超える古文書研究者が二名あった。更に外国からの研究者数名の入館記録がある。

(2) 研究分野について

今回は貸出された文書類を中心とした集計によると、

①日記類では、対馬の日記である「国元」が九六％を占め、その数は一四七四冊を数える。

②記録(一)では、一六五冊のうち表書札方と御郡奉行のもので占められいずれも「土地関係」や「漂着・漂民・異国船」などが主流を占めている。

③記録(二)では、六四三冊のうち最も多いのが「朝鮮」に係わるものが大半を占め、他に「奉公帳・寺社方・巡検」などが利用されている。

④記録(三)では、一六一冊であるが「宗家奥向関係・異船来泊・朝鮮関係」の順で研究されている。

⑤その他の文書のうち「島庁文書」「朝鮮刊本」「地方文書」等の利用も少なくない。

子どもたちの手紙

その一　今里小　五・六年一同

ぼく達の修学旅行の時は、いろいろおせわになりました。

対馬じかを見た時に、どこのしかかなあと思っていたら、今里のだと教えてもらってびっくりしました。ぼく達は、夜なにげなくしかの鳴き声を聞いていましたが、そのしかのことはろくにわかりませんでした。

昔の人たちが、しかをどのように利用していたかという説明を聞いたら、しかの皮はきものなどに使っていたということでとてもびっくりしました。

昔の人は、いろいろな道具がなかったので、みじかな物を工夫していたということは知っていましたが、それがどんな物かを見たことがありませんでした。でもそういう道具をみせてもらったり説明までもしていただき、とてもうれしかったです。

また、資料館に行くきかいがあればぜひ行きたいです。

その二　北小　三年　小島亜貴

おじさん、この前の見学はとても楽しかったです。めずらしいものばかりでした。その中でも、とってもよかったものは「みの」です。おじさんがせつめいをしているとき、わたしはしんけんに聞いていました。

大むかしのいろんなものやむかしよくいた動物など、とても楽しいものがありました。とても勉強になりました。これからも、いろんなものをてんじして下さい。さようなら

資料寄贈者一覧

（受付順・敬称略）

平成二年度当館へ資料のご寄贈をいただいた方をご紹介いたします。ありがとうございました。

○考古資料〈黒燿石〉　那須　久

・伊万里市黒川町塩屋一三四

○民俗資料〈薬戸棚〉　茂村　彰

・対馬厳原町今屋敷七五三

○民俗資料〈磯立網〉　梅野源九郎

・対馬厳原町曲三八六

○民俗資料〈桶細工道具〉　齋藤弘征

・対馬厳原町厳原[illegible]三四六

○書籍文書・歴史資料　薦田初子

・福岡市早良区昭代三丁目九－二二

○美術資料〈パネル写真〉西田康則

・長崎市平野町一四－七

歴史民俗資料館の案内

○開館日

・休館日を除く火曜日～日曜日

○休館日

・国民の祝日及び月曜日

・十二月二十八日～一月五日

○開館時間

・九時～十七時（土曜日十二時）

○入館方法

・一般の観覧は無料です

・入館時に入館者名簿に記入する

・展示品の撮影は禁止します

○資料等の利用手続

・資料等を利用する場合は、入館の許可申請をしてください。

平成二年度職員一覧

館長	山下義之
総務課長	城谷豊実
指導主事	日高元之
研究員	日野義彦
〃	大畠精一
〃	三浦忠和